青苧（あおそ）の火

伊藤　亨

「源次が寺から逃走したらしい」

北之荘神社の惟清（これきよ）宮司が吐き捨てるように云った。

「え！　まことでございますが？」

「今朝、真福寺から連絡があった」

「なんてこった、あれからまだ半年にもならぬというに……わしらの顔に泥を塗りおって！」

名主の善兵衛は顔を紅潮させ、こぶしで床を叩いて激怒した。

「お里や新助にはどう云ったものかのう……気の重いことじゃ」

宮司は困リ果てた様子で顔をしかめた。だが、いくら気が重くとも、善兵衛はこのことを名主として彼らに伝えねばならなかった。新助はともかく、お里の険しい表情が目に浮んだ。

お里の亭主文吉は、畑の中で源次と争い、重傷を負った。源次は卑怯にも鎌を持ち出し、その刃先が、文吉の肩を抉ったのである。知らせを聞いて駆けつけた時、文吉は畦道に倒れていたが、まだ口を利くだけの気力はあった。

「あんた、どうしてこんなことに……」

血まみれになった文吉にすがりつき、お里が泣きながら、質した。

「源次にやられた。あいつ、鎌を持ち出しやがって……」

急を知らせてくれた村の者二人に手伝ってもらって、お里と新助は文吉を戸板に乗せ、家まで運んだ。

医者が巻いた血止めの布から、じわじわと血が滲み出し、文吉は一晩中、うめいた。お里も新助も、ただ、おろおろするばかりで為す術もなかった。朝方、意識が無くなり、文吉は昼過ぎに死んだ。

野辺の送りを済ませてから、お里と新助の親子は、いいつけ通り名主の家を訪れた。代官所へ訴え出るといきまくお里を、名主の善兵衛が押えて云った。

「お里さんの気持ちはよく解る。じゃが、時期が悪い。青苧（あおそ）の訴えがようやく認められ、しかも、何のお咎めもなく落着したところだ。もし、北之荘村の中に、対立のあることが知

れたら、お役人の思う壺だ。村が一丸になっていてこそ、役所も手が出せぬというものじゃでな」
「そんなら、うちの亭主はやられ損ということですか？」
「いや、源次をそのままにして置くことは出来ぬ」
　同席していた宮司の惟清が横から口を挟んだ。
「今も善兵衛さんと話していたところじゃ。頭を丸めさせて、隣村の真福寺に預かってもらおうと思うが、どうじゃな？」
「それで何とか辛抱してはもらえまいか……」
　善兵衛がことばを継いだ。お里はなかなか納得しなかったが、遂には折れた。これからも村で暮らしていかなければならない親子にとって、それ以上、名主や宮司に逆らうことは出来なかったのである。
　米があまりとれない山間の農民は青苧の栽培に従事した。青苧は寒冷の地を好み、適当な湿気と、風があまり吹かないことを条件としたから、多くは山間部で栽培された。その繊維は強靭で、絹糸のように光沢があり、織物の生産地に送られて上布となった。藩は青苧の栽培を奨励した。青苧は高価で取引され、藩の財政を潤したのである。
　北之荘村でも細々と青苧の栽培を続けていた。青苧は年に二回刈り取られる。一回目は七月頃で、一番苧と呼ばれた。二番苧は九月頃に収穫され、一番苧に比して上質であった。北之荘村は他村に比して、生産高も少なかったから、一番苧のみを上納し、二番苧は免除されていた。彼らは二番苧に頼って、生活していたのである。
　八月の始め、一番苧の上納が終って間もなく、二番苧の二割を上納するようお触れが出た。他村と異なり、収穫量の少ない北之荘村にとっては死活問題であった。村の主だったものが名主の家に召集された。
「大変なことになった……」
　名主の善兵衛は苦渋に蒼ざめた顔で、一座の者を見渡して云った。昨夜は一睡もしなかったのであろう、鬢のほつれが頬にかかり、目が赤く潤んでいた。
「これでは死ねというも同じだ」
　誰かが叫んだ。
「訴願するか、逃散するしかねえ」
「訴願しても、お上はうんとは云うめえ」
「それに訴願すればきついお咎めがある」

「それじゃ、このまま死ねと云うのか」
様々な意見が出されたが、堂々巡りであった。
「訴願するしかねえ。どうせ死ぬのなら、同じことだ。大体、お上の都合だけで、こんな無体を押し付けられて、はい、そうですかといって引き下がれるか！」
文吉がしっかりとした口調で云った。
「わしもそう思う。文吉の云う通りだ」
組頭の伝蔵が膝を乗り出して云った。大体、話が訴願の方向に傾きかけた時、源次が声を張り上げた。
「俺は反対だ。願いの筋は通らず、きついお咎めだけを受けるということになりかねない。いや、そうなるのは目に見えている」
「やってみなけりゃ判らない。このままでは村が立ち行かぬ」
組頭が説得を試みたが、源次は応じず、頑強に云い張った。そうして、遂には席を立って、帰ろうとした。二、三の者が源次に続いた。
「勝手にしろ！　卑怯者が……」
文吉が喚いた。
訴願は実行に移された。名主の善兵衛、組頭の伝蔵、文吉他二名の者が、代官所に出頭した。
代官の冬木正邦は、善兵衛以下、決死の覚悟を秘めた百姓たちの迫力に押された。
「嘆願の筋は確かに承った。だが、拙者の一存ではどうにもならぬ。これは預かって置く。後日、沙汰する。それで良いな」
代官とはいっても、百五十石取りの、一官吏に過ぎない正邦にとって、即断できる種類の問題ではなかった。
代官の報告を受けた藩の上役たちは、北之荘村の動きが、一揆や打ちこわしに発展することを怖れた。他村ではすでに以前から二番苧の二割を上納させていたが、北之荘村とは生産の規模が違った。しかし、この不穏な動きが、何時、他村へ普及せぬとも限らなかった。
願いの筋は聞き届けられた。しかも、訴願に対する何のお咎めなく、ことは終ったのである。
だが、しこりは残った。主義を貫いた文吉たちに、源次は引け目を感じ、それはやがて憎しみへと変わって行ったのである。

「源次は何処へ逃げおったのかのう」
お里が青苧の甘皮を剥ぐ手を休めて云った。青苧は刈り取った後、一晩清流に浸される。皮を剥ぎやすくするためである。一本一本、表皮を剥ぎ、更にそれを水に浸して、甘皮と呼ばれる部分を剥ぎ落とす。こうして出来上がったものを、二日ばかり陰干しにするのである。手間のかかる仕事であった。
宮司の惟清と善兵衛が来て、ことの次第を伝えたのは二日前のことである。
僅か半年余りで、寺を逃げ出したというのは、もともと出家などする気はなかったということだ。頭を丸めたのも、方便に過ぎなかったのだ、と善兵衛は憤懣をぶちまけた。だが、全ては後の祭りであった。行方知れずになったものを、今更、代官所に訴えてみたところで、どうなるものでもなかった。
「逢ったら、ただではおかぬ！」
同じように、お里と並んで仕事をしていた新助が、うめくように云った。文吉の死は彼らの生活の上にも重くのしかかっていた。文吉という働き手を失った彼らは、昼夜の別なく、働かなければならなかったのである。
「馬鹿なこと考えるでねえ。お前なんかの敵う相手ではねえだ」
源次は天明道場に通っていたことがある、とお里は云った。
新助も天明道場のことは聞き知っていた。道場主は、孫兵衛という近隣の大百姓で、先祖は武家だったということである。武芸に長じ、近隣の百姓たちを相手に道場を開いていた。教養もあり、人望の厚い人となりのようであった。
「何時頃のことだ？」
「ずっと昔の話だが……」
しかし、木刀など手にしたこともない、十八才のお前など、源次にしてみれば赤子も同然だ、とお里は決めつけた。
新助は唇を噛んだ。口惜しさに涙が滲んだ。
人の訪う声が聞こえた。出てみると、お雪だった。
「おう、お雪か！　驚いた。久しぶりだな」
お雪とはもう一年以上も会っていない。それがひょっこりと現れたのだから、新助が驚いたのも無理はない。久しぶりに休みが貰えたので――　とお雪は云った。
お里はお雪を自分の子どものように可愛がっていたから、大喜びで、家の中に招じ入れると質問攻めにした。

元気にしているか、雇い主はどんな具合だ、同僚とはうまくやっているか、仕事は忙しいのか――等々である。
「そんなことより、おじさんがあんなことになってしまうなんて……」
お里の矢つぎ早の質問に一応答えた後で、お雪はそういって、声を詰らせた。
お雪は新助より三才年下であったが、以前に較べて背も高くなり、ことば遣いも宿場勤めの所為か、随分、大人びて、娘らしくなった感じだった。色が白くなり、肌も艶やかで、開き始めた蕾の美しさがあった。
「忙しそうね。手伝うわ」
「いいよ、せっかく休みを貰って帰って来たというに……」
「手伝わせて、そうしたいの」
彼らは三人並んで、甘皮剥ぎの仕事を始めた。そうしていると、昔と少しも変わらなかった。お雪はそのようにして、昔に帰りたかったのかもしれない。
村はずれの山裾に、稲荷神社の小さな祠がある。三年前の或る日、新助はきのこ取りに出掛け、遅くなった。秋の陽はつるべ落しで、あたりには夕闇が漂い始めていた。祠の前で、一人の子女が何かしている。お供え物をしているのかと思ったが、反対であった。盗んでいるのだ。
「何をしている！　お供え物を盗むなぞ、罰が当たるぞ！」
女の子は泣き始めた。問い質すと、昨日から何も食べていないという。順二の家の娘だった。父親は三日前から、寝込んでいるという。粥を作って食べていたが、米も芋も尽きた。弟や妹が腹を空かしている、と彼女は云った。それがお雪だった。
新助はお雪を家に連れ帰り、お里に事情を話した。
「かわいそうに……」
お里はお雪に炊き立ての御飯を食べさせた。継ぎはぎだらけの着物を着たお雪は、俯き加減に、黙々と御飯を食べた。その姿は新助に深い印象を与えた。口に物を運んで食べるという日常の平凡な情景が、その時はひどくもの哀しいものに写った。それは食さなければ生きられない、人というものへのいとほしさであったかもしれない。
お里は大きな握り飯を幾つか竹の皮に包んで渡した。
「これを持って帰って、みんなに食べさせると良いだ」
お雪の父親の順二は、田畑を持たぬ百姓で、雇用労働者として、あちこちの野良仕事を手伝い、生計を立てていた。以前は土地持ちの百姓だったが、父親が身を持ち崩して、田

畑を質地に取られ、遂には失くしていたのである。
文吉は順二を見舞って、二分の金を借し与えた。それは文吉にとっても痛手だったが、見捨てては置けなかった。
「何とお礼を云って良いやら……」
順二は気弱そうな目をしょぼつかせ、文吉の手を押し頂いて、涙を流した。
順二は文吉に受けた恩を忘れなかった。文吉のことを〈旦那〉と呼び、閑が出来ると、文吉の家に来て、こまめに仕事を手伝った。お雪も同様で、川の清流に浸した青苧を運んだり、お里や新助と並んで、青苧の表皮剥ぎを手伝ったりした。お里には新助しか子どもがいなかったから、お雪をわが娘のように可愛いがった。
「あれは好い子だ。大きくなったら、お前の嫁にするべえ」
冗談とも本気ともつかず、お里はそんなことを云ったりした。
文吉は父親の所為で苦労している順二を哀れに思い、名主の善兵衛に掛け合った。
「順二に手余り地を貸してやってもらえねえですかのう。小作のことについては、俺らが責任を持ちますで」
こまごまとした年貢その他の取り決めを行った後、善兵衛は承諾した。これで、貧しくとも順二一家の生活は安定する――文吉はそう思った。だが、子沢山の一家の生活がそれほど楽になったわけではなく、翌年、お雪は宿場町に下女奉公に出た。
別れの挨拶に来たお雪を新助は橋の袂まで見送った。
晩秋の冷たい風が吹き荒れていた。枯れ果てた薄や葦、雑草に囲まれて、その時期になると青苧を浸す清流が、鉄色を帯びて鈍く光りながら流れていた。どんよりと曇った空を背景に、散り遅れた桜の病葉が宙に舞う。それらはやがて訪れるであろう、厳しい冬将軍の到来を告げていた。
お雪はお里や新助に会えなくなるのが哀しいと云って泣いた。
「宿場にはごろつきや、質の良くねえものがいると聞く。気を付けるんだぞ。ええか！　あまり辛えようだったら、逃げ出して、帰って来い」
遠ざかっていく彼女を見送りながら、新助は、あの日、俯き加減に御飯を食べていたお雪の姿を思い浮かべた。それはそのまま、今のお雪の姿でもあった。
一年ぶりに里帰りしたお雪は、夕刻までいて、新助らと一緒に食事をした。
「楽しかった。今度、いつ会えるかしんねえけど、それまで達者でいて下せえ」
お雪はそう云って、涙ぐんだ。

文吉がいなくなってから、火が消えたような毎日が続いていただけに、お里も新吉も、お雪同様に楽しかったのである。だが、お雪が帰ってしまうと、それだけに、深く、索漠とした空虚感が漂った。

夜具に入って目を閉ざすと、戸板に乗せられ、血まみれになった父の姿が浮んだ。血は流れ続け、戸板を滴り落ちた。布で押えても、押えても、血は次から次へと溢れ出た。

「畜生！　源次の奴め！」

叫び続けた父の声は、やがて呻き声に変わり、遂には途絶えた。あの日の光景がまざまざと蘇える。思い出すまいとしても、夜毎、その記憶は執拗に蘇えった。

文吉が死んでから、しばらくして、お里は急速に老け込んだ。足腰が痛むと云い、食事もあまり摂らなくなった。冬に風邪を引いたのが素で、その時の咳がなかなか取れず、微熱が続くようになった。やがて、お里は寝込んでしまった。新助ひとりでは青苧の仕事も思うようにはかどらなかったが、順二が身を粉にして手伝ってくれた。ようやくに一番苧の上納を終った頃、お里は死んだ。

あの日の父の記憶が、夜毎、彼を苦しめた。思い出すまいとすればするほど、父の無残な姿が蘇えった。それは新助に文吉の無念を晴らせと呼びかけているようでもあった。源次は父を奪い、母をも奪った。お里は源次に殺されたようなものだ――新助は孤独の中で、源次を憎んだ。無残な姿の父の記憶を消すためには源次を殺し、仇を討つしかない、と新助は思った。

二番苧の収穫を終えて間もなく、耳寄りな情報が飛び込んで来た。遠く離れた城下町で、源次らしい男を見た者がいるというのだ。どこまでが本当なのか分からなかったが、新助は遂に意を決した。

彼は自分の土地を質地として名主に差し出し、金を作った。自分の土地の一部を順二に小作させるよう依頼することも忘れなかった。

「こんな部屋で済まねえです」

お雪が食事を運んで来て云った。

新助がお雪と同村の百姓だと分かると、宿屋の番頭の態度は一変した。

「あいにく、どの部屋も塞がっているんで」

金ならある、と云いたかったが、どんなところでも良いから泊めて欲しいと頼んだ。結局、新助が泊まったのは蒲団部屋であった。

「お雪に逢いに来たんだ。どんな部屋であろうと構わねえ」

「嬉しい！　……けど、どうして……何かあっただか？」
「もう、お前とはこれきり逢えなくなるかもしれねえ。そう思ってな」
「まあ、そんな……」
「実はおっかあが亡くなった。それもこれも源次の所為だ」
「おばさんが！」
お雪は絶句した。新助はことの次第を説明し、自分の決意を話した。
「それじゃあ、今度は新さんが殺されるかもしれねえ。そんなのは嫌だ！」
「そうなるかもしれねえ。でも、一旦、男が決めたことだ」
「嫌だ、嫌だ！」
お雪は駄々をこねて、泣いた。そんなお雪の姿を見るのは珍しいことであった。それまで、お雪は殆ど自分を主張することなどなかったからである。
夜四ツを過ぎて、眠りに落ちかかった時、そっと蒲団部屋の戸の開く音がした。お雪だった。驚く新助の前で、お雪は襦袢姿となり、蒲団の中にすべりこんで来た。
「……私の身体に……新さんの思い出を刻んで……」
お雪は激しく喘ぎ、新助の胸に身を投げかけた。狭い蒲団部屋の空間に、若い男女の肉体が匂った。
城下町に着いて、宿をとり、二ヶ所の剣道場を訪ねた。とりあえずは下男として住み込むためである。一ヶ所は断わられたが、中西派一刀流の戸川道場で、雇って貰うことになった。道場主の戸川宣郷（のぶさと）は、痩身の気品のある武士で、新助にとっては近寄り難い存在のように思えた。
用足し、買い物など外向きの仕事から、薪割、掃除、風呂焚きなどの細細とした家の中の仕事まで、新助の仕事は多様であった。だが、若い彼は疲れることもなく、懸命に働いた。そうして、少し手が空くと、道場を覗いた。門弟たちの木刀の運びや、打ち込みを学ぶためである。
あっという間に、半年が過ぎた。新助は木刀を手に入れた。彼は夜、みんなが寝静まった頃を見計らって、裏庭に出た。そして、見よう見まねで、木刀を振るった。彼はそのことを通じて、木刀の扱い方もさることながら、腕力を鍛えることの大切さを学んだのである。
仇討ちを心に決してから、不思議に父の記憶は遠ざかった。代わりにお雪の記憶が彼の脳裏に蘇えった。まだ子どもだと思っていたお雪の身体は、意外に豊満で、はちきれんば

かりであった。女体がこのように白いものだとは思いもしなかった。興奮と幻惑の中で過ぎたあの夜が、今となっては夢の中の出来事のように思える。だが、それはまぎれもない事実であった。

勝たねばならぬ。勝って、お雪の許へ帰らねばならぬ――新助は懸命に木刀を振るった。

夜中に小用に立った宣郷は、木刀が空を切る音を聞いた。

「そこで何をいたしておる！」

宣郷は新助に自分の部屋まで来るようにと云った。

「何の積りじゃ。百姓が剣術を習って何とする」

「申し訳ねえです。実は……」

新助はことのいきさつを話し、自分の決意を語った。

「ふむ、そうであったか。見上げた心根じゃ。明日から、時を定めて、道場に入ることを許す」

「え、本当でごぜえますか！」

「そなたのことは師範代にも話しておく。門弟に稽古をつけてもらうがよい」

「ありがとうございます」

叱られるものと覚悟していただけに、天にも昇る心地で、新助は部屋を出た。

勘定方に勤める若い武士、渋沢正邦が非番の日に新助を指導することになった。道場では九番目に名を連ねる剣士である。新助より三才年上であった。

「腰が入っておらぬ。剣は腕だけでは打てぬ。腰で打つのだ」

稽古は厳しかったが、正邦は至極気さくな若者であった。

「拙者、里芋が好きで、庭で栽培しているのだが、上手く作れぬ。そなたは百姓をしていたと聞いているが、教えてくれぬか？」

「多分、水が足りねえのだと思います。日当たりが良くねえといけねえし、しかも、乾燥を嫌いますで、根元を藁などで覆ってやるといいと思います」

新助は土づくりから、植付け、事後の手入れなどについて話した。

「そうか、大いに参考になった。拙者はそなたに剣術を教えるから、そなたは拙者に百姓を教えてくれ」

「お易いご用ですだ」

正邦は家禄二百石の武士であったが、庭先を畑にしていた。趣味と実益を兼ねて、野菜づくりをしていると正邦は云った。新助が手の空いている時は、正邦の屋敷まで出向いて、

野菜づくりを手伝うこともあった。
「ご苦労さまでした」
そんな或る日、縁先で正邦とひと休みしていると、奥方が茶を運んで来た。
「これはこれは、もったいねえことです」
「早く、仇が見つかるといいですね」
奥方が来ると好い匂いがした。百姓女にはない匂いであった。
「とんでもねえ。まだまだ先のことです。腕を磨いて、それからのことです」
「そうだ。まだ、二年は早い。今のままだと、返り討ちに遭うのが関の山だ。新助、返り討ちに遭わぬよう、みっちりと鍛えてやるからな」
「まあ、二年もでございますか？」
奥方が驚いたように、身を反らせた。
「その代わり、二年かけて、どんな野菜でも作れるようにみっちりと新助に教えて貰う。どうじゃな？」
「おそれいります」
新助は笑顔で答えたが、心には深く期するものがあった。
その夜、誰もいない道場で、新助は木刀を振った。
あと二年、石に齧りついてもやり通さねばならぬ。継ぎはぎだらけの着物を着て、俯き加減に、黙々と御飯を食べていた遠い日のお雪の姿が浮んだ。二年したら、必ず、お雪に逢いに行く、必ずだ！新助は唇を噛み、固く己に誓った。
歳月は夢のように流れた。北之荘村を出てから、三度目の春が訪れようとしていた。消え残ったまだら雪の下から、黒い大地が顔を覗かせ、雪解けの水が絶え間なく、小さな音を立てて流れた。寒さに耐えた木々は一斉に芽吹き、早くも薄い緑の衣を装い始めていた。
そうした或る日、新助は道場に呼び出された。門弟たちは帰った後で、道場主の戸川宣郷と、新助の指南役渋沢正邦の二人が着座していた。
「今日は特別に大先生がお相手をして下さる」
「恐れ入ります」
足のすくむ思いであった。
「仇と思って、存分にかかって参れ」
宣郷が云った。
新助は懸命に木刀を振るったが、無論、彼の敵う相手ではなかった。

「よく修練いたした。相手は道場通いをしていたということじゃが、そなたくらいの腕なら、ゆめゆめ引けを取ることもあるまい。今日を限りに、暇を取らす。仇の探索に専念し、本望を遂げるが良かろう」
「ありがとうございます」
感涙に咽びながら、新助は平伏した。
道場に迷惑をかけてはならなかった。新助は宿を取り、源次の探索を始めた。
源次の所在は意外に早く判明した。人宿の番頭の口から、源次が大身の武家の中間奉公に出ていることが判明したのである。さらに中間仲間の口から、他の武家屋敷の中間部屋で行われる博打に、源次がしばしば出掛けることも知れた。
遂に望みを果たす時が来た。新助の心は燃え立った。彼は五両で刀剣を買い求め、刀に馴れるために、素振りを繰り返した。
武家と異なり、百姓の仇討ちはご法度である。単なる殺人に過ぎない。新助は口上書を認め、懐中に収めた。
〈謹んで申し上げます。
源次は私の父を殺した仇です。出遭えばお役人に引き渡すつもりでございますが、粗暴な男ですので、争いになるやも知れません。その時は切るか、切られるか、いずれかと存じます。私に何かあった場合のことを考えて、申し述べる次第です〉
博打が行われる武家屋敷の前には、都合良く、松の林が広がっていた。新助はその松の林に潜んで、機会を待った。源次の姿は幾度か見かけたが、いつも仲間がいた。
辛抱強く、独りになるのを待つよりなかった。
機会は間もなくやって来た。戌の刻、源次は独りで武家屋敷の通用門から出て来た。こんなに早く帰るのは、多分、博打に負けたからであろう。
「源次！」
源次は怪訝そうに新助を見た。
「お前、誰でえ？」
「忘れたか、お前に殺された文治の息子だ」
「あ！新助……」
「どうして寺を出た！　今となっては、父の仇だ。お前を殺す」
「ふん、お前みてえな若造に俺が殺れると思うのか、来い！」
源次は脇差を抜き、正眼に構えると、じりじりと間合いを詰めた。源次はたかをくくっ

ていたのだ。大きく振り上げ、正面から打ち込んで来た。身をかわされて、よろめくところを、新助の剣が肩先から切り下げた。あっけない勝負であった。新助が切り下げた肩は、奇しくも源次が文吉に打ち込んだ鎌先の場所と同じであった。

止めを刺し終えた頃、屋敷の中から数人が走り出て来た。彼は捕えられ、役所に突き出された。口上書を差し出し、簡単な取り調べを受けた後、新助は入牢を申し付けられた。

入牢から三日目が過ぎたが、何の音沙汰もなかった。

お雪にはもう会えぬかもしれぬ――新助は疲れた気分で、ぼんやりと牢屋の窓から空を眺めた。

新緑に彩られた庭木の梢が、風に揺れていた。もう、すっかり春であった。北之荘村の春が思い出された。山々は緑に覆われ、斜面には薄く紅を刷いたように山桜が咲いていることだろう。やがて、五月ともなれば、青芋を燃やす焼畑の火が、炎の海となって、夜空を焦がす……お雪と一緒に眺めた壮大な炎の風景が蘇える。懐かしさが新助の胸を締め付け、彼は涙ぐんだ。

五日目の朝、新助は牢から出された。不思議なことに、新助は白州ではなく、座敷に通された。

平伏する新助の前に、奉行はゆったりと腰を下した。

「新助、朗報じゃ。殿よりあっぱれであるとお褒めのことばがあったぞ」

「は？」

何らかのお咎めがあると覚悟していた新助にとっては、意外なことばであった。奉行はにこやかに続けた。

「下男を続けながら、三年近くもの間、武芸を磨き、苦労を重ねて仇を討つなど、百姓でありながら、武士に勝るとも劣らぬ立派な心掛けじゃと、重役どもも感心されておった。しかも、口上書まで携えておるとは、並々ならぬ覚悟の人物じゃと、しきりに褒めておられた。で、そなたを士分にとりたててつかわすとの仰せじゃ」

「え？」

「どうじゃ、異存はないか？」

にわかには信じかねることばであった。新助は動転した。

「本当でございますか？」

「偽りを申して何とする。牢に五日間も留め置いて、申し訳なかった。奉行所は奉行所として、有り体を調べねばならぬ。道場の戸川殿からも話はお聞きした。また、そなたを召抱

えるに当たっては、いろいろ協議せねばならぬこともあり、時を過ごした。許せ」
新助は徒組に、五十石で召抱えられた。封建社会における身分制度の枠組みは強固に存在したが、こうした例も幾つか散見される。新助は二十両の支度金を下賜され、それまで空き家になっていた敷坪二百坪の屋敷を拝領した。道場主の戸川と九番弟子の渋沢から、一字ずつを貰い受け、渋川新之助と名のった。
半年が夢のように過ぎた。一日も早く、お雪に会いに行きたかったが、多忙の身は侭ならず、藩庁の許しが出たのは、夏も終わりの、秋風の立つ頃であった。
「同じ村で育った娘を、妻にしたいと思うのですが、許していただけるでしょうか？」
新之助は番頭に伺いをたてた。武家の婚儀には、上役の許しが要ると正邦から聞いていたからである。それまでにも、幾つかの縁談はあった。だが、その都度、新之助は断わり続けてきたのである。
「渋川の家はそなたが起こしたものじゃ。それまではそなたは百姓であった。百姓女を嫁に娶っても、何の不思議もあるまい」
番頭は解ったような、解らないようなことを云ったが、許可が出たことは確かであった。
あれ以来、お雪は如何しているのであろうか――継ぎはぎだらけの着物を着て、黙々と御飯を食べていたお雪の姿が蘇える。枯野の道を、不安を胸に下女奉公に出向いて行ったお雪の後ろ姿が忘れられなかった。新之助はひたすら道を急いだ。
「お雪はいるか？　いたら呼んでもらいたい」
「どちらさまで？」
立派な身なりの武士姿の新之助を見て、宿屋の番頭は怪訝な顔をした。
「お雪と同じ村のものだ。この前は蒲団部屋に泊めてもらった」
「あ！　どうもその節はご無礼をいたしました」
覚えていたかどうか、番頭はひたすら恐縮した。
「お雪はもうここにはおりません。〈三国屋〉という川そばの小料理屋で働いています」
街道と距離を置いて、川が平行に流れていた。宿場町はその間に挟まれる形で展開している。三国屋は宿場町のはずれに、川に面して建っていた。
料理を注文してから、お雪を呼んだ。最初、お雪はそこにいるのが新之助であることに気づかなかった。挨拶をして、横に座った。
「お雪、久しぶりだな」

その時になって、お雪は初めて新之助に気づいた。
「あ！　新さん」
お雪の驚き様は尋常ではなかった。
「そうだ。新助だ」
「心配していました。生きているんだか、死んでいるんだか解らないし……いつも新さんのことばかり考えていました。仇は無事討ったんですか？　どうして、そんな侍の格好なんかしているんです」
お雪は客扱いに慣れて、丁寧なことばを使った。幼さの残る顔に濃い化粧をして、派手な着物を着ていた。お雪は酌婦になっていたのだ。
「侍になったんだ」
新之助は一別以来の出来事を語った。お雪は肯きながら、熱心に耳を傾けた。とくに仇を討つ場面では、身を乗り出すようにして、固唾を呑んだ。
「それで、五十石で召抱えられた」
「五十石？」
貧しさしか知らぬお雪にとっては、想像もつかぬ数字であったろう。
「それから、二百坪の屋敷も頂いた。それで、お前を迎えに来たのだ。嫁取りについては、番頭さまからお許しも頂いている」
「もう遅いの……せめて、もう半年早ければ……もう遅いわ」
自分の身体は汚れてしまった、とお雪は云った。家には仕送りもしなければならない。お嫁になど行ける身分ではない――お雪は泣いた。
「それはお前が好いてしたことではないだろう。もう、過ぎたことだ。このような生活から、足を洗わなければならぬ。」
「あたしのような女、立派なお侍になった新さんのお嫁になどなれない。新さんはお武家さんの娘を嫁にすべきです」
「馬鹿を云うな。俺はお前が嫁に欲しくて、迎えに来たんだ。過ぎたことはもういい。忘れろ……」
新之助は繰り返し説いたが、お雪は頑なに拒み続けた。
「お前、好きな男でもいるのか？」
お雪は一瞬、口を閉ざした。
「矢張り、そうなのか」

お雪は小さく肯いた。男と一緒に所帯を持とうと話し合っている、とかぼそい声で云った。

「そうなら仕方がない。だが、その男に会わせろ。どんな男か見てやる。もし、お雪を不幸にするようなことがあれば、ただではおかぬ――それだけは伝えておきたい」

それが新之助の旅の結末であった。せめて、それくらいはしなければ、遠い道程を旅してきた新之助にとって、浮かぶ瀬がなかったのである。

お雪は承諾し、翌日、三国屋で男と会うことになった。

仙造といい、江戸から流れて来た若い男で、大きな宿の料理人をしているということであった。

新之助の絶望は深かった。こんなことなら、武士になるのではなかった。仇討ちを終えると直ぐに、お雪を迎えに行くべきであった。お雪を妻にして、もう一度、北之荘村を訪れたかった。そうして、壮麗な青苧の野焼きの炎を、お雪と一緒に眺めたかった――。だが、総ては後の祭りであった。

仙造は遊び人風のいなせな男であった。お雪はこの男に弄ばれているのではないか、ふとそんな気がした。

「私はお雪と同じ村の出だ。お雪を嫁にと思って来たのだが、お主が先口だというので諦めた。お雪を幸せにしてやってくれ。一日も早く、こんな生活から足を洗わせるんだ。よろしく頼む」

「恐れ入りやす。何とか早く一緒に所帯を持ちてえと考えているんで……」

「そうしてくれ。くれぐれも云っておくが、もしお雪が不幸になるようなことがあったら、承知しないからな」

「へい。解っておりやす」

二人のやりとりを聞きながら、お雪は傍らで、ただ、泣くばかりであった。

「それじゃ、お雪、達者でな。もう、会うこともあるまい。仙造さんと幸せに暮らせ」

「新さんも……」

お雪はそう云って、大粒の涙をぼろぼろとこぼした。

お雪は不幸な女であった。貧しさのどん底で喘いでいた。お雪は仙造と本当に幸せになれるのであろうか――新之助の足どりは重かった。

山道にさしかかった時、新之助は背後から駆けてくる足音を聞いた。仙造だった。息を切らせながら、仙造は云った。

「旦那！　やっぱりいけやせんや。どうにも辛抱できねえ。お雪さんがかわいそうだ。あっしはお雪さんとはなんでもねえんで……ただ、お雪さんに頼まれて、そういうことにしたんです。こうでもしなけりゃ、旦那が諦めてくれねえ。あたしは新さんにはそぐわねえ女だ。新さんには幸せになってもらいてえ。そのために身を引くのだ。こういうんでさあ。いじらしいじゃありませんか……でも、これじゃ、あんまりお雪さんがかわいそうだ」

「それは本当か！」

「本当ですとも……早く行ってやって下せえ」

そうだったのか――新之助は踵を返した。

新之助の胸の中に青苧の野焼きの炎が赤々と燃え上がった。

おわり